
車酔いの少女

げんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車酔いの少女

【Nコード】

N3145Y

【作者名】

げんたろう

【あらすじ】

読書大好き女の子と、大人びた隠れチートな男の子の、ちょっと恋愛風味な学園モノになる予定です。にぎやかしの脇役を後ほど投入予定。

バスで読書に夢中なクラスメイトは、男の子の視線にちっとも気付きません。気付いた後の彼女は・・・？

車酔いの少女1（前書き）

初投稿です。宜しくお願いします。

車酔いの少女1

毎朝同じバスにのる女子生徒がいる。

調査したところ、水野かなめ 中3 E組。

彼女は毎朝ブックカバーをかけた本を読みながらバスに揺られ、バスから降りるとフラフラと校舎に入る。

E組の前を通ると、親しい友人と話し込んでいる彼女をたまに見ることが出来るが、本を読む姿はバスでしか見ることができない。

そんな水野とは3年になって同じクラスになった。

毎朝バスで逢うのはいままで通り。

だが、彼女は俺に気づかない。バスの中での彼女の視線はいつだって本だ。

バスから降りるとフラフラと校舎に入るのもいつもの通り。存在感がないとは言えないと思うのだが、いつまでたっても俺に気づかない。

4月のある日。

日直だった俺は、いつものバスから降りたあと部室ではなく教室へ向かった。

同じバスに乗っていた水野も教室に向かうものと思っていたのだが・・・彼女は反対側の棟にフラフラと

向かっていく。

日直の仕事をこなしていくと、ちらほらとクラスメイトも通学してきた。

水野の姿は、ない。

そしてホームルーム直前に「おはよう」と言いながら水野がクラスに入ってきた。

「おはよ。なに？またギリギリ？」

「おふとん、気持ちよすぎるんだもん」

「あははー。気持ちはわかるけどねー」

などとクラスメイトといい交わしながら着席する水野。

おかしい。

毎日ギリギリなはずがない。早朝、始発のバスで彼女は学校に来ているのだ。

ホームルームが始まるまでの1時間と少し。一体何をしている？

俺は翌日、彼女を尾行することにした。

始発のバスに乗り込むと、相変わらずブックカバーをつけた本を読む水野。

ハードカバーに布製のブックカバーとは珍しいな。

バスから降りると相変わらずフラフラと校舎に入り、やはり逆の棟に向かっている。

行先は・・・。

「すみません、休ませて・・・ください」

「またなの、水野さん」

呆れ顔で言ったのは校医。

「バスで本を読まなきゃいいのに」

「だって、ヒマなんですもん・・・」

「酔ってりゃ世話ないわよ。教室で読んだら？」

「なんででしょう、机だと読む気が起こらないんです。バスとかベツドとかなら・・・」

「まあ、気持ちちは分かる気がするわ」

なるほど。

空白の一時半は保健室で寝ころがりつつ、読書をしていたわけか。フラフラしていたのは、車酔いが原因。

中々楽しませてもらったぞ、水野。

謎が解けて。

俺の水野への関心は消えたかと思ったのだが・・・。

バスに乗ればまず水野を探すし。

フラフラと校舎に入る水野を観ると、なんとなく笑みが浮かぶ。

さて、お前はいつ俺に気づくんだろうな？

車酔いの少女1（後書き）

男の子の名前が出ていないことに、チェックしていて気付きました。
次は多分、出ます。

車酔いの少女2

「あれ？」

「水野か。休日に図書館とは感心だな」

「買うほどに小遣いがあるわけじゃないからさー」

気分を変えて市立図書館で勉強でもしようかと足を向けると。
そこでクラスメイトの水野とあった。

同じバスで通学しているわけだから、同じ図書館を利用している確率も高いわけだ。

が、立海の図書館は蔵書もかなり充実している。
市立図書館になにか利でもあるのだろうか？

聞けば『思春期の微妙な乙女心だよ・・・』と水野はつぶやいた。

「どういう意味だ？」

「本読むっていうの、あんまり知られたくないかなー・・・って」

「いい趣味だとおもうが・・・」

「本読んでいると友達とおしゃべりできないし、『真面目』とか言われそうだし。私おしゃべりも好きだし真面目でもないし、誤解はされたくないなー・・・って」

「クラスで孤立する可能性もあるからか」

「・・・ズバっといいますね、森川君」

まあ当たり前だけどね。と水野は言った。

「だが、もう15歳だ。そのような幼稚なことは誰もしないだろう」

「分かってはいるのですが、ね。既定観念が抜け切れないのです」

水野はそう言うと『それじゃあね』と検索ルームへ向かった。俺はなんとなく後を追う。

「・・・こっちに用事？」

「そうだな」

「ふーん？」

水野は小さなメモを取り出すとキーボードで打ち込んでいく。ブラインドタッチとは・・・あなどれないな。

そしてレシートを出力するとカウンターへ持っていく。どうやら本の検索をしていたようだ。

司書から本を5冊受け取り「再来週の土曜日までです」と言われた彼女は、エコバックに本を詰め込み

「それじゃあね」と俺に声を掛け、帰ろうとする。

「まて」

「?なに？」

「なにを借りたか興味がある」

「・・・・・・」

水野は無言でトートバックを突き出した。

「オヨヨ大統領・・・？」

「い、いいじゃない！」

崇高な本かと思いきや。

かなり昔の娯楽小説だった。本は手垢でボロボロで、彼女はそれに

ブックカバーをかけるのだろう。
バックを水野に返すと「重いからもう帰るね」と彼女は再び俺に背を向けた。

2週間後。

「また逢ったな、水野」

「すごい偶然だね？」

偶然ではない。

バスで彼女の読書進捗をチェックし、今日返却すると計算したのが・・・相変わらず俺に気づいていない水野には『偶然』でしかない。

「面白かったか？」

「まあこんなもんかなー、って感じ。やっぱり時代設定とか古いし」「なるほどな」

彼女はカウンターに本を返却すると「じゃ、私はこっちだから」とパソコンルームに向かい、俺は当然後を追った。

再びメモを取り出した水野は、相変わらず見事なブラインドタッチで蔵書を検索している。

後ろでそれを見ていると、今回はまた別のジャンルらしい。

「ピカソ・ゲルニカの真実、キリストとアイコン、アールヌーヴオの世界、曼荼羅と仏たち・・・」

「！ 何見てるのよ、森川君！」

この二週間で水野にどんな心境の変化があったのだろうか。
芸術に興味があるとは思わなかったのだが・・・データ不足か？

水野はプリントアウトすると、司書に貸し出しをお願いする。
俺は本待ちの水野の横で、なんともなしに一緒に待っていた。

「じゃ、私帰るね」

「まて」

「・・・もう何を借りたか見たじゃない」

「荷物が重いから帰るというなら、俺が持ってやろう。少々質問がある。時間をもらうぞ」

「・・・（強制！？）」

そして一階のロビーの椅子で、俺達は体面して座った。

「なぜだ」

「は？」

「前회가オヨヨ大統領。今回が宗教美術。お前の思考回路が知りた
い」

「・・・いや、別に。意味ないけど」

「だが、メモを持参していたということは、どこかで何かがあった
はずだ」

「尋問するほどの理由じゃないけど・・・」

「ほう。なにか理由はあるのだな？ 聞かせてもらおうか」

「・・・今度、ピカソ展が美術館であるから下準備しようか」

なって……。ついだから美術系で
まとめようかなーって思ったら、ミュシャ好きだし。イコンは以前
なんかの本で読んでて、曼荼羅は中学の修学旅行で東寺で……。っ
て思い出したから」

水野のなかではきちんと理由があったらしい。

俺は満足して水野を開放した。

水野は訳がわからないといった顔をしながら帰途についていった。

さらに二週間後。

「やあ、水野」

「……もう偶然じゃないね。クラスメイトの観察日記でもつけて
るわけ？」

さすがに分かったようだが、ちよつとズレた返答が来た。

「……ふう、もう何でもいいよ」

水野はカウンターで本を返却し……。今回は書架のほうへ向かった。
俺も後を追う。

ついた先はスポーツコーナー。

「今度はスポーツか」

「……まあね」

木城はグルリ、と本を見渡すと俺に言う。

「バスケの分かりやすい本選んでくれる？」

ほんのちよつと耳が赤い。

俺はそれを確認してから、書架に手を伸ばした。

車酔いの少女2（後書き）

苗字だけ出ました！ 森川君です。
で、バスケット部のようです（分かりにくいですが）。

車酔いの少女3

俺は水野と付き合うことになった。

が、日常にたいした変化はない。彼女は公表を拒み、その理由が尤もであったため、俺も了承した。

俺と水野は毎日メールでやりとりをし、クラスでアイコンタクトを交わし、二週間に一度図書館デートをする間柄である。

その日も始発のバスに水野は乗っていた。

俺はそれを確認し、彼女がテニスのルールブックを読んでいるのを横目で見る。

確認していないのだが、彼女は俺が同じバスに乗っていることにいまだ気付いていない気がする。

いつもなら彼女は附属校前で降りるはずだったが、彼女が5つ前の公園前で降りた。

俺はとっさに反応できず、バスは再び動き出し・・・ほんのすこしの逡巡後、俺は次のバス停で降り、逆走して水野を探した。

彼女は公園のベンチに横たわっていた。横にはミネラルウォーター。

「水野！ どうした!？」

「う、うう・・・？　なぜごにぼりがわ（もりかわ）ぐんが・・・」

バス酔いか。そしてやはり俺に気付いていなかったのか。

今日はいつもとよりひどいらしく、途中下車したようだ。

俺は、水野の額に手を当てる。

少し、熱い。

「熱があるぞ」

「ヴう。やばり・・・。だから、だえぎれないほどぎもちわるいわ
けっすね・・・」

水野は横になったままバッグを漁り、解熱剤を取り出し、ミネラル
ウォーターで飲んだ。

「お前は薬を常備しているのか？」

「偏頭痛持ちだし、頭痛薬と胃薬は・・・」

ペットボトルを米神にあてながら、水野は言う。

「よし、復活した。もう歩ける。・・・心配させちゃったね、森川
くん」

「たいした事がないなら気にしないでいい。復活が早くないか？」

「吐いたし。スッキリした」

「・・・（吐いたのか）」

俺達はそのまま学校へ徒歩で向い、俺は遠慮する水野を説き伏せて
保健室に同行した。

「車酔いで吐いたようです。少々微熱もあるようでした」

「そう。ご苦労様、森川君」

「いえ。このまま帰らせますか？」

「そうねえ。また車酔いするのがオチだろうし・・・しばらく休ませて様子を見ましょうか」

水野もトンボ帰りでバスに乗りたくないらしく、しきりにコクコクとうなずいている。

「それじゃ、あとで様子を見にくるぞ」

「は？」

「あら？ フッフ・・・？」

水野が妙な声を出し、保険医が意味深な声を漏らした。

二人の声を無視して朝練に向かう俺の背に二人の会話が聞こえる。

「お薬は？ 飲んだの？」

「ハイ。飲みました」

「胃薬は？ あなた市販の薬飲んで、直ぐに胃を悪くするんですよ？」

「・・・飲みます」

「コレで最後じゃない。ちゃんと処方してもらいなさいよ」

「う、ういゝ」

朝練を終えて保健室に行くと、水野はベッドの中で本を読んでいた。俺に気づいて本を布団に隠したがバレバレだぞ？

「だいぶ良くなったようだな」

「うん。解熱剤飲んだし。朝はご迷惑おかけしました。すいません」

「かまわない。・・・で、お前は早退するのか？」

「やー、授業でるよ？」

「ムリしないほうがいいと思うが・・・」

「1授業333円。1日2000円」

「？」

「現金還元されるわけでもないのに、ハードカバー1冊以上の授業料をムダにするのは勿体無い」

珍しい考え方だ。

「薬を飲んでいるのだから、眠くなるのではないか？」

「『3冊本が買える』って念じれば眠気は吹っ飛ぶから、ヘイキ」

そういつて水野はノソリと起き上がった。

「頭痛は昨日、ネットしすぎたからだし。吐いたのは車酔いだから」

「だが、熱があったぞ？」

「森川くんしつこいね。自己暗示って知ってるでしょ？ 思い込んだら試練の道なのよ」

意味がおかしいぞ、水野。

「水野さん、あなたは平気でもクラスメイトにうつるかもしれないでしょ？ しばらく寝て、お昼頃には帰宅しなさい」

保険医も呆れたように水野に忠告する。

「授業が遅れるのがいやなら、あとで友達にきけばいいじゃない」

「そうだぞ、水野。なんなら俺が教えてやる」

「森川君は部活とか忙しそうだからいいよ」

彼氏である俺の申し出をアッサリと却下する水野は『仕方ないかあ』と布団にもぐりこんだ。

「そうそう。本読んでもいいから横になってなさい。それでも随分違うのよ？」

「はあい」

水野は布団に隠していた本を取り出すとページを広げた。

ブックカバーに隠れたタイトルを見ることは出来ないので、俺は水野から本を取り上げた。

「初めてのバスケ 応用編・・・か」
「う」

ブックカバーをはずすと、図書館所有の印であるタグがない。ということは水野の私物である可能性が高いな。

「初心者に応用編は難しすぎるのではないか？」

「ちゃんと初級用から読んだもん」

「読むだけでは分からないことも多い」

「森川くん、近頃の図書館ってすごいんだよ？」

ブックカバーを元通りにし、水野に返すと反抗的なセリフが戻ってきた。

「月×バスケのバックナンバー見たよ。森川くん、写真映り悪いね！」

「……………」

「どこぞの部長がジャーニーズか！ってくらいキラキラ映ってたけど。なんて名前だったかなあ？」

「……………」

「本当に背景がキラキラしてた。エフェクト効果っていうんだよね、ああいうの。本人のリクエストかな？」

「……………」

「それでね。そろそろバスケ部に入部しようかと思って！」

「……………ほう」

「あー、うんうん。森川君の言いたいことはわかるよ。十段階評価で3の私がバスケ部に入っても3日ももつわけが無いだろうなーと思うっているんでしょ？」

「ウチの運動部はハードだからな。水野には酷だとは思う」

「うん。私もムリだとおもう。握力もヒトケタだし」

「幼稚園児並みだな。ちなみに俺の握力は65だ」

「わー。今度リング潰してみせてよ」

「断る」

「……………ま、バスケ部には入部するけど、ラケットを振らないでいい業種があるでしょ？」

「マネージャーか」

「そう！ 今日のお昼休みに出す予定なんだ」

「しかし、入部届けを出した当日に熱で休み、というのはイメージが悪いのではないか？」

「そーだよねえ」

水野は本の間から入部届らしき封筒を取り出した。

俺はその封筒をサッと奪うと、表に書かれた文字を読む。

「『女子』バスケットボール部 御中」

「……俺が顧問に渡しておいてやろう」

「森川くんが？」

「ああ、顧問とも顔見知りだ。水野のことだ。決心が鈍る前に提出したいだろう。任せておけ」

「わー。ありがと！ これで心置きなく早退出来るよ！」

ニコニコと微笑む水野に少し心が痛むが……。

そして、俺は水野の入部届けを顧問に提出しに向かった。

翌日

「おはよう、ゆりかちゃん。顧問の先生何か言ってた？」

「え？ 何を？」

「何をもって……ゆりかちゃんバスケ部の主将でしょ？」

昨日ね、

入部届けだしたんだよ」

「あんた昨日休んでたじゃん。しかもバスケ部に入部届けって・・・運チのアンタが・・・脳みそ沸いた？」

「早退だもん。入部届けは森川くん経由で顧問の先生に渡しているはずなの。部員じゃなくてマネージャーだけど」

ガタン！

海野ゆりか 女子バスケ部主将・水野かなめの親友、が立ち上がった。

「ばっつっつかじゃないの、あんた！」

「えええええ！？」

「森川秀司に！ 『生徒会書記』に！ 『男バスの軍師』に！ 『彼氏』に！ 女子バスケ部マネージャーの入部届けを預けた！？ あんた、まっちがい無く男バスのマネージャーになってるよ」

周囲に気を使い「彼氏」の部分だけは小声だが、「！」がつくほどには念入りにゆりかは言った

「えええ！ い、嫌だよ、男の子の、しかも男子バスケ部のマネージャーなんてムリだよ！」

「男の群れは避けて通る子だもんねえ、アンタ。でも、間違いなく100パーセントあんたの所属部活は男バスだね」

「ど、どうしよう！？」

「退部とかムリだよ、あそこ。自主退部NGだもん。ミーハーで入

った子は即刻退部&コート付近の通行禁止だけどねー。アンタ、演技でもミーハー出来ないっしょ？ サボりも出来ない性格」

「う、うう・・・」

「男バスに骨をうずめるのね」

車酔いの少女3（後書き）

むりやりっぽいですが、名前だしました。秀司君しゅうじです。

そして、『隠れ彼氏』の陰謀により、男バスのマネージャーになりました。

ゆりちゃんはマブダチなので、2人の関係を知っています。

次は愉快的なバスケ部のメンバーが出てきます。

車酔いの少女4

「新しいマネージャーの水野かなめさんだ」

「・・・・・・宜しく願います。出来る限りフォローをさせていただきます」

ボール拾い　そして　ボール磨き。

モップ掃除。

ドリンクの準備。

洗濯は各自でするので必要ナシ（タオルも同様）。

部室の掃除に救急箱の管理。

テーピングの練習。

スコア付けに部誌の管理

ポール籠は重くて引きずってしまつて、体育館を傷つけてしまうので、免除。

レギュラー陣でお話するのは、部長に副部長そして森川くん。

「の、野々宮部長・・・・。部誌、です・・・・」

「ありがと。・・・・うん、よく書けてるね」

「お、大友副部長・・・・。一年生の練習スケジュールの確認お願いします」

「貸してみろ。・・・・ふむ。だいたいはいいが・・・・そろそろ練習

試合も入れるか」

「森川くん。スコアはこれで、いい？ 大丈夫？？」

「どれ。・・・見やすいな。さすが水野だ」

3人そろって3恐か！？ 部活終了間際のこの時間が一番緊張する・・・・！

かなめはホツとため息をつく、二年生のところにやってきた。その足取りは軽い。

「佐川くん、テーピングの具合、どうだった？」

「今回はズレなかったっすね。上達しましたね、先輩！」

「本当？ 佐川くん、練習台ありがとうね」

「こんくらいいいっすよ！」

「今度はね、腕、お願いしてもいい？」

「腕、っすか？」

「うん。バスケやっているときは流石に無理だから・・・。今から」

「なるほどっすね。・・・いいっすよ。チャッチャとやりましょうか！」

「ありがとう！」

かなめは肌色のテーピングを取り出すと、佐川の右腕を固定し始めた。

「にしても・・・。緊張してますねー」

「部長達のこと？ そりゃあ、お師匠様みたいなものだもん。部長にニッコリ笑って『やり直し』とか、副部長に『なっとらん！』と

か森川くんのため息付かれるかとおもうと・・・胃がキリキリしそう」

森川とはナイショのお付き合い中だが、ソレとコレは別なのだ。

バスケに真剣な森川は格好いいとおもうし、彼女だからという理由で採点を甘くしない姿勢も立派だ。

だからこそ、カンペキにこなしたいと思うわけで・・・

「でも、一度もダメ出しされてないっすよね」

「そりゃあね。もう全精力をそそいでやってるもん。精神力がエンプティだよ。LPゼロみたいな？」

「先輩ひよつとしてあのゲーム、やっちゃってます？」

「あ、LPでバレちゃったかー」

「オレも好きなんすよー」

「今度新作でるよね、対戦型。佐川くん、買う？」

「モチっす！」

「それじゃあ・・・私とも遊ばない？ あんまり仲間がいなくて・

・オフ会はちょっと勇気いるし」

「アブねっすよ、女子でオフ会は。オレでよけりゃ喜んで♪っす」

そんなかなめをこっさり見るのはバスケ部ナンバー3。

「水野さん、ちっとも懐かないなあゝって思ってたんだけど、一年や二年とは仲良しなんだね。しかもヒロヤ・・・」

「お、オレは真剣に取り組んでいる者を頭ごなしに叱りなどはっ！」

「ようするに、水野は俺達に対する認識が浅いのだろう」

「誤解は早めに解きたいよね。水野さん、マジメだし真剣に取り組んでくれるし」

「うむ。歴代のマネージャーで随一の働きぶりだ」

「ね、佐川くん。腕動く？」

「ま、多少は・・・でもこんくらい動かないと俺飯も食べませんし」

「あ、そうか！ ごめんね。外そうか？」

「一晩くらいいいっすよ」

「うん・・・。でも、毎日お願いしているの悪いよね。他の準レギュ達にもお願いしようかな・・・」

「それなら俺達が協力するよ？」

「「！」」

ヒロヤが飛び上がり、かなめはブンブンと首を横に振った。

「ぶ、部長方にご迷惑をお掛けするわけにはっ！」

「そ、そっすよ！ 一年二年で練習台になりますんで！ 先輩達はいっっすよ！」

結構可愛くて。マジメで優しいマネージャー。しかも趣味まで合うという相手だ。

テーピングの練習相手に事欠いているのなら、練習台になるくらい

どうってことない。

3年生はしゃしゃり出なくて結構！（本音）

「でもね、かなめちゃん」

「か、かなめちゃん！？」

「いいよね。同じ部活なんだし。オレのことは野々宮部長じゃなくって、春都でもでいいよ？」

「い、いえっ！！（こ、コワイよう）」

「じゃあ、追々ね。・・・話は戻るけど、実際テーピングするのってオレ達が一番多くなるよね？ レギュラーだし」

「・・・部の方であればテーピングの必要性は誰しにもあると思いますけど・・・」

「うん、でもレギュラーが多いと思うんだよ（断言）」

「そ、そうなんですか？」

「そうなんだよ。だからね、俺の脚や腕のことも知って欲しいんだよ。一人ひとり太さやリーチが違うわけだからね」

「！」

そういえば！ と開眼するかなめ。

佐川の腕と大友の腕を見比べれば・・・確かに。

でも・・・・・・怖い。

こんな人たちの前でぎこちないテーピング技術を披露なんて・・・・・・
・・・やっぱりムリっぽい。

森川だと照れるし・・・。

いや、でも！

女子バスケ部のマネージャーをやるつもりで、なんでだか（森川の

せい) 男子バスケット部に入部しちゃったけど! やることはどちらも一緒! 同じバスケット! 部長だって副部長だって森川くんだって同じ中学3年生! 恐れるなんて、おかしいのよかなめ!!

「や、やらせて頂いていいでしょうか……大友副部長」

かなめは一番腕が太そうな大友を練習台に選んだ。野々宮の表情が黒く曇り、森川の目が細くなる。

「なんで、正隆?」

「!(ビク) 一年生や二年生と違って一番身体が出来ているので、差を感じるには一番いいのでは、ないか……と」

「かなめちゃんは、本当に理論がブレないんだね。まあ正隆はたしかにデカいね。秀司より筋肉質だし。

でもね、かなめちゃん。日本男児の平均に一番近い体格なのは、俺だから(笑)」

「! は、はい! 是非野々宮部長にも練習に付き合ってくださいきたいと思います!」

「そう? じゃ、今度の日曜日。部活が休みだし、みっちり練習しようか☆」

「……………え」

「用事あるの? ないよね?」

「に、日曜日は二週に一度図書館に行っていました! ちょうどその日なのですが!」

「じゃあ、図書館で待ち合わせしようよ。そのあと町に出ればいいし」

「ま、町？」

「テーピングの材料にも色々あるしね」

「そ？そうですね？？」

あれ？　なんだかおかしくない？　と思うかなめだが、野々宮の
ほうが一枚以上上手だ。

図書館の日は森川と逢うのが恒例だが、これでは逢えなさそう
だ。なぜか日曜日は野々宮と逢うことになったかなめは、今回の練習
台である大友と部室横のベンチへ向かった。

「わあ・・・」

「？」

「大友副部長も、一年前は佐川くんみたいに細かったんですか？」

「俺はプロテインを飲んでるからな。筋肉の成長は一般よりも早
いはずだ」

「プロテイン・・・傷ついた筋肉をさらに補強するために飲むたん
ぱく質ですよ」

「そうだ。よく知っているな」

「スポーツ医療の本は色々読みました。読んだだけじゃダメなん
ですけど」

「まだ若いんだから、実戦が足りないのは仕方あるまい」

「（同じ年なんだけど・・・）」

ガツシリとした大友の腕にテーピングを貼る。
やっぱり佐川のときより長さが必要だ。

「スジがここだから・・・」

「関節がココだ。固定するときは」

「ココですね」

「そうだ」

「副部長、腕がスベスベですね」

「ブッ！」

「爪もきれいだし・・・健康状態がいいんですね」

「そ、そうだな」

「成績優秀でテニスも強くて・・・尊敬します」

「み、水野もよくやっていると思うぞ」

「そうですか？」

「ああ。細かいところに行き届いたサポートをしてくれている。練習も随分しやすくなった」

「そう言う風にいわれると、マネージャー冥利につきますね」

ニコッ。

かなめは初めて、大友を真正面から見て微笑んだ。

大友の身体が硬直し、テーピングしているかなめにもその変化が伝わる。

「大友副部長？ どうしましたか？」

「！ なっなんでもないっ」

「そうですか？」

「あ、ああ！　なんで水野は同じ年の俺に敬語なのかと思っただけだっ」

逃げ口上だったが、気になっていることを大友はつい口走った。

「テニス部では先輩ですし、大友副部長は貫禄があるから」

「だが、同じ部活の仲間だ。あまり堅苦しいと距離を置かれている気分になる。秀司程度には砕けてもらえんか？」

「それじゃあ、大友くん？」

「あ、ああ」

「・・・わかった。ねえ、大友くん、テーピングこんなカンジでいいかな？」

「そうだな。もう少し強くてもいいが、軽度であればこれでも十分だろう」

「そっか・・・。ありがとう！」

「いや。俺たちのためにしてくれていることだからな」

「いい雰囲気じゃない？」

「正隆にしては、上手い事やった。と言えるな」

「かなめちゃんに微笑まれて硬直してるしね。・・・雲行きが怪しいな」

「野々宮、お前・・・」

「ま、日曜日が勝負だからね！」

車酔いの少女5（前書き）

野々宮部長が出張りまくりです。

車酔いの少女5

「それじゃあ、明日。図書館に11時でいいかな？」

「え!？」

土曜日。部活終了後。

野々宮部長が私の肩をポンと叩いてにこやかに言った。
数日前のアレがよもや本気とおもわず、声を上げると、なにやらひんやりとした空気が・・・野々宮部長から漂ってきた。

「『え!？』って忘れていたの？ ひどいなあ」

「い、いえっ！ 忘れていたとか、ではなく。せつかくの休日に部長にご足労なんてっ！」

本気で申し訳無い。あと緊張する。

「あのっ！ 気にしないでください、本当に。両親相手に練習してもいいんですし」

「うん、でもね。やっぱりやってもらう相手のほうがいいと思うんだよ？」

結局野々宮部長に押し切られました。・・・いいのかな？

「断るほうが、機嫌が悪くなる。野々宮のわがままに付き合うつもりで相手にすればいい」

部活帰り。方向が一緒なので必然的に森川くんと帰ることになる。お付き合いもしていますし。

土曜日は日の高いうちに帰れるけど、平日はちょっと遅めなので、自宅まで送ってくれるのだ。

その後、森川君は徒歩で帰っているらしい。30分かけて・・・！
！ 毎回申し訳なさで一杯だ。

グルグル考えているうちに森川くんの降りるバス停になった。

「気をつけて帰るんだぞ」

「うん。お疲れ様、森川くん。それで明日だけど・・・」

「そうだな・・・。野々宮と分かれたら連絡をくれないか？」

「う、うん」

「俺も楽しみにしていたからな。短い時間でも逢いたい」

森川君はあっさりしようゆ顔（死語？）でかなりの殺し文句をはいてくれた！！！！

男子に免疫があるわけがないこちらとしては、「あ、はははは」と笑うしかない。本当はここで「あたしも」って言ったほうがいいんだらうけど！ 言えないよ！！ 言えるかあ！

ところで、部長と会うときは制服のほうがいいのかな？

翌日。

熟考の上、ブルージーンズのロングスカートに黒いTシャツにカーディガンという格好にしてみた。

足元はビリケンシュトゥックのサンダル。初夏から秋口にかけて愛用しているお気に入りだ。

そして本が5冊入ったエコバックに、テーピングの入った肩掛けのバッグ。

11時待ち合わせだから・・・10時ちよい過ぎくらいに図書館に付いたら、本を物色できるよね。

いつもどおり図書館について返却。そしていつもの通りメモを片手に検索コーナー。

「何借りるの？」

「！ 野々宮部長！？」

なんで！？ まだ10時半前だよ！？

「図書館では静かにね。俺も一緒に探してあげるよ。メモ見ていい？」

なんだかデジャヴだ・・・。わたしは野々宮部長にメモを見せた。

「・・・タイトルだけじゃはっきり分からないけど、ジャンルがバラバラだね。推理小説にホラーに、バスケット関連に、ワーグナーの伝記？」

「は、はい。この間視聴覚室でオペラ聴いて・・・」

「そうか、ワーグナーだったよね。よし！ 本探そうか」

そして私はワーグナーのオペラにまつわる本を2冊、推理小説を2冊、ホラー小説を1冊、テニス関連の書籍を2冊借りた。

全てハードカバー並みの厚さの本なので、嵩むし重いが私にはいつものことだ。

グレーのエコバック（汚れが目立たないから）にズボット入れるとちょうど11時。

「探してくれてありがとうございました、野々宮部長」

「俺もかなめちゃんの読んでいる本に興味あったし。楽しかったよ。それにしてもそんなにたくさん、いつ読んでいるの？」

「朝練が終わるのって少し早いのでチャイムが鳴るまで部室で読ませていただいています・・・」

「恐縮しなくてもいいんだけど。そういう使い方なら文句は言わないよ。授業サボってゲームやら昼寝をするヤツも居たしね」

「え!？」

「もちろん、俺や大友で制裁したけどね」

ゲームって・・・佐川くんかな？

ともかく、図書館で立ち話も何だし・・・とエコバックを肩にかけようとする野々宮部長が、すっとそれを奪った。

「俺が持つよ」

「そんな・・・だって私が借りた本ですし」

「でもね、かなめちゃん。君がテーピングの入ったバッグを持って更にこの本を持つとするだろ？ 手ぶらの俺があまりにも甲斐性な

しつぽいじゃないか」

それじゃあテーピングのほうを・・・と思ったけど。ダメだ！ バッグには黄緑色の大きなコサージュついている！ 男の子には恥ずかしすぎるグッズだよね・・・。

「部活で筋トレしてるし、このくらい軽いよ」

「あ、ありがとうございます」

か、借りなきゃ良かった・・・。もしくは夕方に借りればよかったのよ。私のバカ！

図書館を出て、どこでテーピングの練習をするのかな？ と思いながら部長の後をついていくと、オープンカフェにつれてこられた。

「お昼を食べようか」

え！？

いやでももう11時半過ぎているし、昼食タイムには違いはないけど！ 部長と二人でお昼！？ しかもこんなオシャレな店で！

「中学生でも大丈夫な安心価格だよ、ここは。俺ね、ここのフィッシュバーガーがお気に入りなんだ」

そんな風に言われると・・・断れない。

「それじゃ、私もそれで・・・」

「飲み物は何にする？」

「コーヒーのホットで」

考えていいですか。

なんだかこれって・・・。

デートっぽくないですか！ うわーうわーうわー！

部長とデート！？

いやいやいや。そんなの部長に失礼だよ。

だって野々宮部長だよ。全国紙に載るわ、インタビュー受けるわ・・・。

・・・。メンズノ●ノ出身とかジャニー●●って言われてもおかしく無いさわやか系イケメンな上、全国制覇を成し遂げたバスケット部の部長。最強の中学男子プレイヤーだよ！！

ありえない。私とはステージが違う。

そう、これは教育っ。

出来ないマネージャーの教育なんだよ。ご飯食べたらテーピングだもん。

私は美味しいフッシュバーガーを食べながら、野々宮部長のにこやかな質問にたどたどしく答えるのでした。

「かなめちゃんは何時に寝るの？」

「部活に入ってから11時です」

「起きるのは6時くらいかな」

「は、はい（何でー）」

「宿題とかどうしてる？ 部活やっていると中々出来ないよね」

「休憩時間に出来る限りやって・・・あとはやっぱり自宅ですね」
「あ、俺もそんな感じかな」

「かなめちゃんの今日の服って甘すぎないけど可愛いね。スカートが多いの？」

「スカートしか持っていないんです」

「そうなんだ。でも似合っているしいいよね。髪は下ろしているのが多い？」

「体育と部活のときくらいです。長く結んでいると頭痛がするし・・・。一部ピンで纏めたりしますけど」

なんか、全然テニスに関係ないような？ 生活態度の質問？ 生徒

(?) 指導???

「ねえ」

「?はい？」

「そろそろいいかなって思うから言うんだけど・・・敬語止めない?」

「? 敬語使っていましたか? ...って使っていますね」

「うん(笑) 同じ年だし、おなじ部活だし、もう少し砕けて欲しいんだけど?」

ああ、大友君もそういていたよね。

わたしったらテニス部の人に妙に距離を置いているとか思われている?

「それじゃ、野々宮君でいい?」

「まだ硬いなあ」

「でも、苗字の呼び捨ては……。今まで男の子にそんなことしたことないし」

「じゃ、春都くんにしようか(笑)」

「……………え？」

「うん、そうしようね？ 部長とマネージャーなんて一心同体みたいなもんだよ。他の部員より仲良くて当たり前だもんね。俺もさらに親しい風にして『かなめ』って呼ばせてもらうから」

よ、よびすて！！ しかも決定！？

い、いやいやいや！ それよりも野々宮くんを……。いきなり名前呼び！！！？

む、むむむむ無理！ 男の子を下の名前で呼んだのなんて、ヒトケタ年齢以来だもん。無理だよ！

彼氏(キャー！)の森川君ですら「森川君」なのに！！！！

わたしはブンブンと首を横に振った。

「大丈夫だよ、慣れるよ。さあ練習しようか」

そして私は……。オープンカフェで

「かなめ」「……………は、はるとくん？」 「疑問系はいらないよ、かなめ」「ははは春都くん」「月乃」「は、春都くん」

とドモらないようになるまで、延々と呼び合いっこを続けたのでし

た。

いやー！ー！ どのバカップル！！??
森川君とだってこんなことしたことないよ!?

そして。

「俺、観葉植物が好きなんだ。花屋見てもいいかな」

とは、春都くんに誘われ（ドモリは治りませんでした）。
観葉植物のレクチャーを受けて、真剣に聞いたり。

今からだとトマトがプランターで育てられるときいて、つい苗を購入してみたり。

夕方、は、春都くんに自宅に送ってもらってから・・・テーピング
の練習をしていないことに気づいたのでした。

私ってバカ!?

そして結局森川君とも逢えず仕舞いでした・・・。

翌日。月曜日。

「おはようかなめ!」

キラキラオーラで は、春都くんが挨拶をしてきました。
場所は部室。あ、あうゝ皆見てるよゝ。

「お、おはよう。部、あ、野……は、はると、くん」

二度もいい間違えて、そのたびは、春都くんの目がキラリと光って。小さな声で名前を呼んだ。

「もう少し練習したほうがいいかなあ」

「だ、大丈夫！ は、春都くん心配しないで！！」

「ならいいけど（笑） 昨日は楽しかったね。また遊ぼうね」

昨日は『うっかり遊んでしまった』んだけど、は、春都くんは楽しかった……のかな？

ならいいのかな。テーピングは昨日お父さんと練習したし……。

は、春都くんから離れると、大友さんと佐川くんが近寄ってきた。

「水野先輩、いきなり部長を名前呼びますか！？」

「う、うん。なんだかそういうことになっちゃって？」

「疑問系……ということは野々宮に言いくるめられたか」

「そうだとおもう……」

「じゃ、俺もかなめ先輩って呼ぶっす！ 先輩の名前って可愛いっすよね！ 似合ってるっす！」

ゴイン！

「後輩のくせに、馴れ馴れしすぎる！」

「って〜！ 馴れ馴れしいとかじゃないっすよ！ おれとかなめ先輩は仲良しですもん！ モンハン仲間っすよ！」

「さ、佐川くん！ それは言わない約束だったのに！！」

「なに、マネージャー。モンハンやってんの？」

角野くん（3年）が食いついてきた！ モンハンやっていることはなんとなく秘密にしていたのに。

「かなめ先輩はモンハンじゃなくてFFもDQもBHもテイルズもバサラもやってるんすよ！」

「すげーな」

「・・・叔父からお古のソフトを・・・」

「うらやましいっすよ!!」

うう。乙女系は絶対ナイショにしておこう（涙）

車酔いの少女5（後書き）

人気ゲームを叔父から譲り受けるネタは、尊敬する竹本泉氏の某マンガから流用させていただきました。マジでうらやましいです。

ちなみに私はBHとモンハン以外は手を出しています。BHは小説と映画を愛しています。ゲームはクリアする自信がないので手を出していません。

登場人物紹介（緑川中学校）（前書き）

男子キャラが増えたので、ここで登場人物紹介を挟ませていただきます。

プラス、ヒロインの女友達。

登場人物紹介（緑川中学校）

水野かなめ

緑川中学校3年E組

男子バスケット部マネージャー

身長…157センチ（成長ストップ）

得意科目…国語・歴史

苦手科目…数学・体育

趣味…読書・図書館通い・ゲーム

好きな飲み物…ブラックコーヒー

弱点…車酔い

補足…森川秀司と3年5月よりお付き合い開始

BL本と乙女系ゲームの資金は母と叔母がスポンサー

家族揃って本の虫及びゲーマー。

まだ野々宮から観葉植物を押し付けられていない。

プチトマトの鉢はすくすく成長中。

森川秀司

緑川中学校3年E組

男子バスケット部所属

身長…180センチ（成長期）

生徒会書記

得意科目…特になし

苦手科目…美術

趣味…人間観察・読書・バスケ

好きな飲み物…中国茶

弱点…日焼け・絵

補足…2年時に全国大会にレギュラーで出場し優勝

成績は3位から落ちたことがない

水野かなめと3年5月よりお付き合い開始

かなめの対戦ゲーム相手として佐川は適当だと思っていて、携帯ゲームを買う予定はない。

野々宮の観葉植物は現在2鉢。どちらもリビングにある。

野々宮春都

緑川中学校3年A組

男子バスケット部 部長

身長…175センチ（成長期）

得意科目…英語・地理

苦手科目…古典・家庭科

趣味…バスケット・園芸（主に観葉植物）・部員をからかうこと

好きな飲み物…トマトジュース

弱点…調理実習

補足…1年時よりバスケット部レギュラー。2年時は中学MVP。今全中バスケットで一番強い男

レギュラー部員の誕生日には、刺し木して自ら育てた観葉植物の鉢植えをプレゼントする

生育状態は一カ月おきに写メって報告義務有り（部員大迷惑）

大友正隆

緑川中学校3年B組

男子バスケット部 副部長

身長…182センチ（成長期）

得意科目…数学…歴史

苦手科目…とくに無し

趣味…バスケット・オセロ

好きな飲み物…カフェオレ

弱点…砂糖を入れないと紅茶とコーヒーは飲めない。

補足…2年時よりバスケット部レギュラー

1日1回は部員に鉄拳を下す

就寝前にプロテインを飲みながら、ネット対戦でオセロを嗜む
通学前に野々宮の鉢植え3つの手入れは欠かさない。

佐川ヒロヤ

緑川中学校2年B組

男子バスケット部所属 レギュラー

身長…165センチ（成長期）

得意科目…美術

苦手科目…ほとんど

趣味…バスケット・ラクガキ・ゲーム

好きな飲み物…スポーツドリンク系

弱点…部活の先輩・母親

補足…大友の鉄拳制裁率が一番高い

かなめの通信対戦ゲーム相手。マンガの趣味も合う。

準レギュ時にイレギュラーでもらった野々宮の観葉植物は2
ヶ月で枯らした。

角野彰

緑川中学校3年A組

男子バスケット部所属 レギュラー

身長…170センチ(伸び悩み中)

得意科目…数学・科学

苦手科目…音楽

趣味…バスケット・カラオケ・マンガ・ゲーム

好きな飲み物…炭酸系

弱点…たまに男にナンパされる

補足…3年時よりレギュラー

歌唱力はジャイアン並み

野々宮の観葉植物は、持ち帰り時に転んで鉢を割った。

大崎カオル

緑川中学校3年C組

男子バスケット部レギュラー

身長…173センチ(成長期)

得意科目…音楽・体育・家庭科

苦手科目…得意科目以外

趣味…バスケット・料理・ギター

好きな飲み物…日本茶

弱点…胃腸が弱い

補足…2年途中で転校してきた。その後レギュラー入り

野々宮の観葉植物は庭に直植えている。

佐野学

緑川中学校3年D組

男子バスケット部レギュラー

身長…170センチ（成長期）

得意科目…数学・科学・化学・英語

苦手科目…国語・古典

趣味…バスケ・天体観測

好きな飲み物…コーヒー

弱点…乱れた日本語を聞くと眉にシワが寄る。メガネを奪われると戦闘能力が下がる。

補足…3年よりレギュラー。

敬語キャラでメガネキャラ。

野々宮の観葉植物は父親の書斎にある。

海野ゆりか

緑川中学校3年E組

女子バスケット部 部長

身長…165センチ（成長中?）

得意科目…歴史

苦手科目…英語

趣味…バスケ・かなめをからかうこと

好きな飲み物…牛乳

弱点…外人

補足…女子バスケットは県内ベスト8

特にカレシを欲しいとは思っていない。

かなめから貰った誕生日プレゼントは、ちょっと高いシャーペンシル（800円）。

高いだけあって書きやすいと思っている。

登場人物紹介（緑川中学校）（後書き）

名前には難しい名前は使わないようにしています。
この頃の名前って可愛いけど、難しいよね！

家族構成と誕生日は、後日追加するかも。
決めていないのです。大友だけ4月に終わった予定。

車酔いの少女6　　く彼女のカレシく

「そいえばかなめっていつデートとかしてんの？」

「・・・教えません！」

緑川の二年生ホープ佐川は、マネージャーとその友人の会話を偶然聞いてしまった。

「大変っすよ。大変っすよー！！」

バーン！！　と扉が壊れんばかりの勢いで部屋に飛び込んできた佐川ヒロヤは先輩メンバーに先ほどの会話を教えた。

「マネージャーにカレシが居るらしいっす！」

メキヨ。ボコ。パタン。カシャン。ブー。うわっ、きたねえ！

野々宮のロッカーのドアが曲がった。

大友がロッカーで頭を打った。

緑川がロッカーを閉めた。

佐野がメガネを落とした。

角野がコーラを吹いた。
大崎にそれが掛かった。

「佐川、どこで聞いた？」

当然だが、一人動じなかった緑川が冷静に訪ねる。

「マネージャーが友達と話しているの聴いたっす！」

デートはいつやってんのか？って訊かれて『教えない』って言うたっす！

普通なら『そんな人居ない』とか言うじゃないっすか。絶対カレシが居るんすよ！！」

「その発言だと去勢を張った・・・とも考えられるだろう？」

「それはありえないっす！ そんなキャラじゃないっすもん」

「ということは・・・水野さんには現在恋人が居るってことか」

メガネのフレームを気にしながら佐野が呟いた。

「そういうことだな。俺らに気付かれなくてことは・・・自宅デートでもしてんじゃねえ？」

角野がコーラを飲み干しながら返事をする。

「な、なんすかその『自宅デート』って！」

「既にご両親に紹介済みで、互いの家に行き来自由ってこと」
「！！！！！！」

佐川ヒロヤは大ダメージを受けた。

「部活忙しいから誰も恋人いねえよな、俺ら。ってことはマネージャーが一番乗りだな」

めでたいじゃないか。とほんわか顔の大崎の頭を角野がはたく。

「いや！ 俺は許せねーな！ つうか信じられねえ」

「角野君。水野さんは可愛らしく気立てもいい女性です。恋人がいなくてもなんらおかしくはないと思いますが・・・」

「いや！ 水野が男にこびている姿なんて想像できねえ！」

「まあ確かにマネージャーが恋人と腕を組んだり、手つないで下校したりってのは想像できねえな」

ガコ。

野々宮のロッカーの扉が外れた。

森川はそれを見て、ムダだとおもったがフォローを入れた。

「木城に恋人が居ることについて反対なのか？ 部活に支障はきていないし、個人の自由だと思うが？」

「寂しいっす」

「悔しいじゃねえか」

「俺は祝福するぜ」

「複雑な気分もありますが、概ね祝福します」

「中学生で交際とは早いのではないか？」

「相手は誰か気になるよね？」

野々宮が呟いた。

「春都？」

「だってさ、大友。あのかなめだよ？　ほよよんとしているし、妙な男に携帯番号をバンバン教えそうだし、だまされているかもしれない。」

俺たちは徹底的に相手を突き止めて追及しなくてはいけないんじゃない？　だって仲間だから！」

森川は思った。

それは面倒だな、と。

そしてそろそろ潮時かと感じた。

やはり付き合っているというのに部活では仲間のフリ、というのは物悲しい。

森川は挙手した。

「水野と付き合っているのは俺だ」

「「「「「.....」」」」」

部室が静まり返った。

そこへかなめが入ってきた。

「こんにちわー。・・・て、アレ？」

どうしたの？　と1人普通の森川に尋ねるかなめ。

「お前に恋人が居ることが判明したので、相手が俺だと言ったところだ」

「!?!」

かなめの顔が真っ赤になった。

「ううううう、ウソですよ、マネージャー!」

「お前らが……って、そういえば一緒に登下校してたな」

「近所だからだと思っていましたが……」

「登下校中に愛が芽生えてやつか?」

「いや、付き合っていたのは入部前からだ」

「ってことは……自分の彼女をマネージャーにしたってことかよ?」

「秀司、公私混同は……」

「このままでは他の部のマネージャーになりそうだったので、緊急措置を取らせてもらった」

「それじゃあ、仕方ないか」

野々宮が即効で返事をした。

「俺が先に知り合ってたなら現在も違っただろうけど、かなめが俺た

ちのマネージャーになってくれたのは森川の独占欲のおかげなんだし……黙っていたことは許すよ」

非常に偉そうな物言いだが、野々宮だから仕方ない。森川は素直に礼を言った。

「そうか。ありがとう」

「ど、独占欲!？」

かなめが動揺する。

森川はわざとだが、結果2人そろって、野々宮の最初の台詞をスルーしたことになった。

「それに『水野』『森川君』呼ばわりのカップルより、『かなめ』『春都くん^{はあと}』呼びのほうが進んでいるしね。

ランチデートもしたし、手をつないで部活に行ったこともあるし」

全て野々宮が無理やりしたことだが。

「ほー。だが、俺たちは既に家族ぐるみの仲だぞ」

「……くっ!」

「登下校は一緒。メールは1日5通以上。おはようおやすみのメールも勿論している」

「くっ!」

野々宮、惨敗。

「フツーにカレシカノジョやってるんだな」

大崎が呟き、かなめは真っ赤になって硬直していた。

車酔いの少女6 〈彼女のカレシ〉（後書き）

話の進行上、メンバーにばらしてみました。

車酔いの少女7 〱アカデミックカップル〱

「どうやら森川はかなめと図書館デートをしているらしいんだよ」
プリプリ怒って野々宮が言った。部室には2人を除くレギュラーメンバーが居た。

ちなみに、かなめは掃除当番、森川は生徒会の用事で遅れている。

「というわけで、尾行するよ!」

決定事項。

彼には誰も逆らえない。

朝9時。水野家前。

大友・角野・大崎という『(騒がしくて) 森川の尾行にはむかないメンバー』がかなめの担当である。
ミッションとしては、月乃が自宅から出てきたら写真を撮り、野々宮にメールすること。

「なぜ写真・・・」

「私服が気になるんすかね?」

「自分と逢ったときとの服の違いをチェックするんじゃないかね？
・・・恐ろしいよな」

そんなことを言っていたら出てきた。

グレーのロングスカートにサーモンピンクのシャツ。白いストールを巻いている。

でかいグレーのバックは本だろう。

「フツに可愛いっすね」

「デートっつか、おでかけてカンジだな」

「制服と雰囲気が違うもんだな」

パシャッと写真を取り、野々宮に送る。

しばらくすると野々宮からもメールが届いた。

「・・・森川の私服写メとかいらねーし」

黒いパンツに白シャツ。グレーのジャケットの森川の写真が添付されていた。

市立図書館に到着。

入り口には、野々宮・佐野の姿が見える。

すでに森川とかなめは図書館に入っただけ。

「よし。顔がバレているから大崎と角野がカップルに変装して図書館に潜入。

大友はサラリーマンにまぎれて新聞を読めば大丈夫。

佐野はメガネを外せばイけるよな」

いきなり無茶を言う野々宮。ちなみに佐野の裸眼の視力は0.01だ。

「・・・野々宮君はどうするんです？」

「死角からこっそり観て見るよ」

「・・・我々も一緒にしますよ」

そして図書館。

かなめの持ったメモを覗きこみながら、森川が本棚から書籍を取り出している。

「アカデミックなカップルだな」

「お似合いじゃないですか」

「ああいうのなら、既にオレもかなめとやったから！」

本の貸し出し手続きをする二人。

その後、閲覧コーナーで博物館や美術館のチラシを眺めている。

「美術館に行くんでしょうか・・・」

「森川のやつ、県外の博物館のパンフレットを取り出したぞ。・・・
なんてあつかましい」

「・・・・・・」

その後自習室に入ったので、流石に終えず、死角で待機するメンバー。
I。

「大友、何貸し出ししているんだよ！」

「せ、せっかくなのでオレも何か読もうかと・・・」

「せっかく！？ こういうのはせっかくって言わないんだよ、まったく・・・。佐野、園芸雑誌ってどこかな」

「あちらですよ、野々宮君」

「しっかり見張っててよね」

1時間ほどすると二人が自習室から出てきた。

「本返してるっすね・・・。読み終わったってことっすか？」

「自習室で二人で読んだのか？」

「宿題とかじゃないのか？」

再び何かを借り、森川が荷物を持ち図書館を後にする。

「森川君、紳士ですね」

「あのくらいオレだってしたよ！」

「・・・・」

その後も尾行を続ける一行だが、角野がはぐれ、大崎が探しに行く
と大学生にナンパされているところに遭遇。

軽くないなされた大崎が、他メンバーにヘルプに行き、大魔神大友が
大学生を一喝。

とどめに野々宮が毒呪文を唱えて角野を救出・・・などしているう
ちに、2人の姿を見失った。

佐野が残っていたのだが、「これはいいフレームですね」とメガネ
屋に気を取られたのが敗因である。

「結局、不毛なメンバーだけ残っちゃったじゃないか！」

野々宮がブツクサ言いつつも、彼は仲間を放置せずきちんと守るリ
ーダーシップも持ち合わせているのである。

偉そうというか、「俺は偉い」と思っている節があるが、バスケット
部の連帯感が強いのは、野々宮のカリスマによるところが大きい。

「マジゴメン。俺、女の子ナンパしてこよっか？」

「角野のナンパとか、男が引っかけりそうでイヤ」

「・・・・・・」

角野がダメージを受けたところで、全員でスポーツショップに寄る
ことにした。

そこで「偶然にも」2人に出会ってしまうのだが、野々宮が「やあ！偶然だね？」のキラキラスマイルで森川はともかくかなめは誤魔化した。

結局野々宮がかなめから離れず、団体行動に移行し、締めは野々宮行きつけのフラワーショップでお開きとなったとさ。

車酔いの少女7 〵アカデミックカップル〵 (後書き)

森川は尾行に気づいていました。

そして、野々宮以外のメンバーをフォローするため、あえてスポーツショップに行きました。

車酔いの少女 8 トモダチのカノジョ 大友視点 (前書き)

ちっとも描写の出てこない森川君フォローのための友人視点・・・
のつもりでしたが（アレ？）

車酔いの少女8 トモダチのカノジョ 大友視点

俺、大友正隆と森川秀司は幼稚園からの友人だ。

小学校に入ると、共に書道とそろばんを習い始め、少年サッカーチームにも入った。

3年になると共にそろばんとサッカーを止め、俺は野々宮に引っ張られてバスケット、秀司は水泳を始めた。

5年のときに、秀司はスイミングスクールを辞めて少年バスケットチームに入り、2年ぶりに「チーム」となった。

秀司は器用なやつで、書道は5年生段階で2段、ソロバンも初段、水泳もクロールで県内5位の実力者だ。

バスケットも持ち前の器用さと天性の勘、それと努力でめきめきと頭角を現し、最終学年では俺達と共にレギュラーとして、全国にも行った。

そして現在15歳（秀司の誕生日はまだだが）。

俺と秀司は10年来の親友で、知らないことは何もないと思っていた。

男の俺からみても整った顔で、女子には小さいころから人気があった。が、本人は恋愛には興味がないらしく、自分に気のある女子を避けているところもあった。

他のメンバーも女子の話題をしないので、女っ気のない中学時代になるのだらうと思っていたら、秀司が女子マネージャーをスカウトしてきた。

水野かなめを見たとき、愛犬へムへムが初めて家に来たときのことを思い出した。

（名前はオレではなく、兄が付けたということだけは言っておく）
必要以上にオドオドした女子だった。

ちなみに現在のへムへムは、怖いもの知らずの暴れん坊で、水野とは天と地ほど違う。

水野は、俺が声をかけると小さく飛び上がるし、スコアブックを差し出す手などプルプル震えている。

なんでまた男子バスケ部のマネージャーになったんだろうかと思うほど、男子馴れしていない。

そして、俺も女子馴れしているとは言いがたい男なため、最初はなんともぎこちない対応をしていたものだ。

が、慣れてくると部員に媚びもせず、真面目な水野に仲間意識が芽生えてきた。

外面はいいが、実は人付き合いを選ぶ野々宮に至ってはいつのまにか名前を呼び捨てにし、明らかに他の女子と区別していた。

そんなマネージャーに『カレシがいる』というネタを佐川が掴んで来た。

そして野々宮のテンションが上がり、このままでは『マネージャー

をストーカー』もしくは『マネージャーを尋問』という喜ばしくない結果になるだろうと予想したとき。

「水野と付き合っているのは俺だ」

隣で着替えていた秀司が静かに挙手しながら名乗り出た。

以外すぎて誰も最初は信じられなかった。

が、『女子バスケット部マネージャー』希望の水野を、言いくるめて『男子バスケット部マネージャー』にしたり。

（それは犯罪ではないのか、秀司）

すでにご両親には挨拶している上、秀司の親にも紹介済みだとか。

（キッチリしているのは秀司らしいが……。中学生のツキアイとはそういうものではない気がする）

毎日5通はバスケット関連以外のメールのやり取りもしているとか。

（登下校とクラスと部活が一緒に、更にメールまでするのか！？）

たまの部活の休みには一緒に出かけているとか。

（そういえば、このごろ秀司の付き合いが悪かったな）

証明するかのように、秀司に淡々と説明され、その後やってきたマネージャーが赤面しているところを見、「本当なんだな」と納得し

た。

そういう目で、2人を見てみれば、中々似合いのカップルだとも思う。

世間に溢れているカップルとは違い、よくよく観察しなければ、『ただのクラスメイト』にしか見えないのだが、たまに視線を交わしていたり、水野の態度も森川には少し柔らかい。

朝も一緒に登校しているし、夕方自宅まで送って行っているという。

女子に優しい秀司など、この10年一度としてみたことが無い俺には衝撃事実だ。

だが、それだけ水野を大事にしているということなのだろう。

それならば、俺は2人を暖かく見守っていききたい。

車酔いの少女8 トモダチのカノジョ 大友視点（後書き）

大友君は、長い付き合いの間に友情や愛情が芽生えるタイプ。熱しにくく冷めにくい。

かなめが森川が付き合っている時点で『親友の大事なカノジョ』ヘシフトチェンジしましたが、知らないままだったら、気になる存在になってたかも。

車酔いの少女9 トモダチのカノジョ 野々宮視点 (前書き)

野々宮視点がものすごく書きやすくてビックリした。

車酔いの少女9 トモダチのカノジョ 野々宮視点

マネージャーとして有能。
からかって楽しい。

そんな水野かなめと、我がバスケ部一女子に興味なさそうな顔をした森川秀司が付き合っていると知ったときは「涼しい顔してこのやろう！」と思った（笑

特に女子と付き合いたいと思ったことはないけれど、先を越されるとなんだか悔しいもんだよね？

それも、俺以上に「女子に興味ありません。今夢中なのはソートアルゴリズムです」、とか言いそうな理系っぽい森川だよ？

理系っぽいけど、森川は文系にも強いし、全国レベルのバスケ部のレギュラーをしているくらい運動神経もいい。

顔も俺ほどじゃないけど、いい。

それで、カノジョ持ちとか、ちょっとムカつくよね？ 俺だけがそう思うわけじゃないと思うんだけど！

なにその完璧人間、みたいな。

もちろん、俺だって作ろうと思えば彼女なんて直ぐに出来る自信があるけど、登下校を一緒にしたり、メールのやりとりを何回もしたいほど好きな子はいない。

でも、森川にはいる。それもなんか悔しい。置いていかれた、ってカンジかな。悔しいから誰にも言わないけどね。

かなめは『なんでこんな子を女子マネに推薦するんだろう、森川は・・・』って最初思った。

とにかく、人見知りすぎる。

大友に手渡すスコアがプルプル震えているのを見たときは「そんなに、大友が怖いのか」って内心爆笑したよ。

が、慣れてくるとプルプルもなくなり、逆につまらなくなった。構ってみたら、予想以上に楽しい子だった。ちよつとオドオドしているけど、頭の回転は速いし卑屈でもない。

男馴れしていないところが、なんだか楽しかったのに・・・！！

その時点で森川と付き合ってたって、サギじゃない！？

俺の予想では手を繋いでいるかも怪しい2人だけど、それぞれ親には紹介済みだという。それって順番おかしいって思うんだけど。

大友も『？』みたいな顔をしてたくらいだよ？

この間部室に2人きりで閉じこもっていたから（野々宮主観。あくまで偶然）、なんかイヤラシイことしてないかなーとドア越しに盗み聞きしていたんだけどさ。

「水野。・・・俺はなんだか無性に感動したいんだが」

「泣かせの浅田とかはどうか？」

「ブラックユーモア系しか読んでことがない。・・・泣けるか？」

「『壬生義士伝』とか『シエラザード』はかなりクルと思うよ」

「・・・・・・読んでみる」

おいおいおいおい！！

なんの話かと思ったら、本の話か！

しかも感動系？

『感動する森川』とか『泣く森川』とか見たことないよ！ その本読むとき一緒にしてくれよ！ 見たいから！

これがお付き合いしている男女の会話かよ！ って思ったけど・・・・。考えてみたらそういう話は俺達の間で出たことは無い。

いや、出ても困るけど『俺は無性に感動したい気分なので、感動する本を教えてください』って言われてもなあ。

ようするに、この微妙な会話が、この2人のスタンスなんだろう。

しかし『水野、あの本良かったぞ。泣けた』って報告するんだろうか、森川は・・・・。

うーん、その場面、是非立ち会いたい。

すごくローテンションな2人なのに、ものすごく楽しいのは何でだろうね？

俺はこれからも2人に付きまとうつもり満々だよ！

車酔いの少女9 トモダチのカノジョ 野々宮視点（後書き）

いやー『壬生義士伝』ではボタボタ泣きましたよ！ ってことで、本のチョイスは私の実話です。『シエラザード』はじんわりキマした。

ブラックユーモア系は『ハッピーリタイアメント』あたりで。

車酔いの少女10 〈トモダチのカレシ 海野視点〉（前書き）

そろそろご両人視点を書くべきなのですが、照れのせいか、上手く書けず・・・。

車酔いの少女10 〈トモダチのカレシ〉 海野視点

天変地異レベルだと思った。

親友の水野かなめにカレシが出来た。

これが高校生になってからだったら別に驚かない。

中学生時点でかなめにカレシ出来るなんて、思ってもみなかった。

しかも、相手は森川秀司。・・・偶然にも私の席の隣の男子。

背がものすごく高い中学生っていったら、普通ヒョロっこいもんだけど、こいつはそういうイメージはない

顔も中学生というよりは高校生顔で、よくつるんでいるB組のフケ顔・大友と並んでいたら、大学生くらいにしかみえない。

その上、A組の野々宮ほどハデじゃないけど、和風イケメン顔。私もこいつの隣の席を引き当てたときは、クラスの女子からうらやましそうな視線を向けられたもんだ。

ようするに森川はハイスペックな男子なのだ。

対するかなめは、親友と思うくらい気の合う子だけど……………ごめん。親友だから言うけど、ハイスペックじゃない。

シッカリしててマジメなんだけど…………イメージは「ボンヤリ系」運動神経が鈍いからか、椅子から立つときに「よっこいしょ」って言うからかわかんないけど、「中学生でカレシできました」ってい

う流行の最先端(?) を行く女子とは全然違う。

ちなみに、私はかなめからコイバナ聞いた記憶は一切ない。

わたしとかなめのツキアイは9年目に突入しようかというのに、だ！
かなめは男子に興味はない。断言できる。

かなめの興味は、本(マンガ含む)とゲーム。あと母親とおばさん以外では私しか知らないであろう、ボーイズラブ小説と乙女ゲームだ。

(かなめにボーイズラブを教えたのは私で、乙女ゲームはおばさん)ぶっちゃけ、かなめはオタク寄りなのだ。

なのに、バスケで全国優勝経験者の森川と付き合い始めた。告白したのはどっちかと聞いたら「・・・どっち？」と聞き返された。知るか！

よく聞いてみたけど、よくわからない返事が来て「どっちも好きっぽい電波を発信していて、それぞれが受信した」ってところのようだ。

ハッキリしていなくて私ならイライラする。

その後、親友ということで森川を正式に紹介され(知ってるから!)、「色々フォローを頼む」と言われました。

フォローっていても、ボンヤリ系に見えて意外とシツカリしているかなめのフォローってあんまり必要ないんだよね。

今回のお付き合いだって、私から見ても「マジで付き合ってるの？

気配が見えん！」って思うくらいだから。

でもたまに嬉しそうにメール見ているし、日曜日にデートした(どうせ図書館でしょ)とかたまに聞くので上手く行っているんでしょ

う。

親友でも、円満なカップルの話を喜んで聞く趣味は無いので、森川とのツキアイに対しては静観状態。

この間初めて相談されたのが、「バスケット部のメンバーにバレた」ってヤツだった。

バレたっていうか、森川がバラしたんだけど。

かなめって、森川を美化しすぎてんのよね。

女子バスケットに入るつもりが、男子バスケットに入らせられたのだって「森川君勘違いしたのかな」で済ませるし！

今回だって「バレた」って言うてるし。森川がバラしたんでしょうが！

なんか、森川の手の内で踊らされている気がしないでもないけど、まだ苦情を申し立てるレベルじゃないし、まだ静観してても大丈夫かな。

車酔いの少女10 〈トモダチのカレシ 海野視点〉（後書き）

ゆりかささんから見る森川氏は「なんか黒くね？」です。
黒さが増すようなら横槍入れようと考えています。

野々宮とは逆で「ビックリはしたけど、いいんじゃない？」な気持ち。
ち。

かなめに対して過保護にならないように気をつけています。

車酔いの少女11　くさわやかな？朝く（前書き）

視点がかなめ↓森川になった。ヘンだけどそのまま投稿します。

車酔いの少女11　　くさわやかな？朝く

森川との付き合っていることがバレってしまった翌日の朝練。

かなめはいつものバスに乗り、いつものように本を読み、いつものようにバスに酔った。

バレてしまった部員と会うのが照れくさいのだが、それを表に出すのがなんとなくイヤでいつもの通りに振る舞ったら：結果はやはり車酔いだった。

森川は途中からバスに乗り込んでくるが、本に夢中なかなめは気づかない。これもいつものことだ。

「俺を気にしていたら、内容が頭に入らないだろうから、気にするな」

出来た彼氏がそう言ってくれたので、その日もかなめは森川に気付かず本を読んでいた。

森川は一人用の座席に座っているかなめの前に立つと、彼女の読んでいる本をチェックしているのだが、かなめは気づいていない。

今読んでいるのは文字が小さく、いつもより早めに酔うだろうな…

と思っていたと、かなめは5つ前のバス停で本を閉じた。

いつも3つ前まで読み続けるので、森川のカンは当たったようだ。

森川は降車ボタンを押すと「降りるぞ」と小さくつぶやいた。

かなめは、本をカバンにしまうとノロノロと定期券を取りだす。

そこは市役所前で6時代の時間帯では他に降りる人もいなかった。

「おはよう」

「おはよう、森川くん……」

森川は、かなめと付き合い始めてから、数個前のバス停で降りるようになっていた。

二人きりの時間を作りたいということもあるが、少しあるけばかなめの車酔いもマシになるからだ。

学校まで乗ってしまうとかなめは部活で使い物にならない。

以前学校前で降りて部活に行くと、大友が「どうした、水野!？」

顔が真っ白を通り越して紫がかっているぞ!？」と大声で叫び、野

々宮がかなめをお姫様だっこして保健室に連れて行った経緯がある。

かなめと付き合っているのは自分なのに、なぜ野々宮が名前を呼び合ったり、お姫様抱っこ出来たりするのか、内心不本意であったのだが、昨日ハッキリ言ったので、野々宮も遠慮するだろう……いや、

遠慮するタイプじゃないから、今後は意識的に邪魔する可能性が高い。

野々宮のかなめに対する態度は「小動物を思い切り構う小学生」的なものだと思っっている。実際そうだろう。

小動物なら、野々宮から逃げるが、かなめは野々宮の押し付けがましい行為に戸惑い、受領している。

彼女の中では野々宮は『すぐくフレンドリーな部長』といったところか。

かなめは告白でもされない限り、男子を異性として意識しないタイプだ。

森川もハッキリ言うべきか思案したのだが、なんとなく波長で気づき合い、なんとなく付き合いはじめた。

(……いずれ言わなくてはいけないとは思っていたが、今でもいいんじゃないか?)

森川はかなめをみた。

車酔いで顔は白く、目はうつろだ。

車酔いであって、病気じゃない。ベストタイミングではないが、バッドタイミングでもない。人通りもなく、さわやかな朝だ。

朝のかなめは車酔いのせいで、動きと返事は鈍いが、頭は働いている。

特に返事をもらうつもりではないし（観察していれば彼女の好意は感じられるし）、やはり言うっておこう。

「俺はかなめが好きだぞ」

かなめの歩みが止まった。

森川は3歩分ほど距離の空いた状態で振り返って、さらに言った。

「大事な彼女だ」

真っ白かったかなめの頬に、少し赤味がさした。

「……………ありがとう」

「ああ」

森川はスッキリして歩き始め、かなめも後から付いてきた。

部室で「おい、水野!？」 顔が赤い通り返して赤黒いぞ!？」と大友が騒ぐまであと15分。

車酔いの少女11　　くさわやかな？朝く（後書き）

勢いで書いたので、改稿するかもしれません。

かなめが読んでいる本は『ジェノサイド』。

昨日読み終わったので、記念☆ 中学生には難しいことは承知だ！

車酔いの少女　くホットラインく（前書き）

昨晚更新したつもりでしたが、最終決定ボタンを押し忘れ・・・。
データ紛失しました。

車酔いの少女　くホットラインく

「一週間、頼むな」

水野はしっかりしているから、先生安心だよ！。

かなめはバスケット部の顧問である森（社会科教師）から、部活用の携帯電話を預かった。

紺色のそれは、全国２連覇を目指す強豪、緑川中学校バスケット部への唯一のホットラインである。

県大会も近づく中、練習に余念が無いレギュラー陣に預けるよりも、入部間も無いながらも、しっかりもののマネージャーに預けよう。そう顧問が思ってもおかしくないほど、かなめはバスケット部に溶け込んでいた。

鳴るなら放課後。

顧問が言ったとおり、朝練のときに預かった携帯電話は午前中、昼休みと沈黙を守った。

かなめは着信メロディが何かも分からないので、バッグの中のそれがとても気になったが、授業はいつもの通り『ものすごく』真剣に受け、先生に叱られることはなかった。

（一体誰から掛かってくるんだろう？）

他の学校のバスケット関連の人からだろう。

それは、顧問の先生？　それともバスケ部員？　どんな内容で？

掛かってきたら敬語使って「緑川中学バスケ部のマネージャーの水野です」って言えがいいよね、とかなめは思い、携帯電話を気にするのをやめた。

そして放課後。

かなめが倉庫の中で、ボールの空気点検をしているときに、第一報が鳴った。

（来た！）

「はい。緑川中学バスケ部のマネージャーの水野です」

かなめは脳内トレーニング通りに名乗った。

「……………三田中の部長の笹木です」

（みたみたみた……三田！　昨年ベスト4の学校！）

「初めまして。今日より一週間顧問の森先生が研修のため、携帯を預かっています。内容をお伺いして対応させていただきますが？」

かなめはメモをとるために倉庫を出て、部員の練習する体育館の隅に置いているスコアブックのところまで歩きながら話した。

パス練習をしていた部長の野々宮、副部長の大友、そして森川がかなめが電話をしていることに気付いて、こちらを向いた。

かなめは、ホワイトボードに「三田中のササキ君」と3人に向けたメッセージを残す。

そして、そのままそこに彼の言うことを書き記していった。

『24日、午後 練習試合、緑川中で』

森川が近寄り、スケジュール帳をパラパラと捲る。野々宮に向って頷くと、野々宮が両手で○を作った。

「はい。大丈夫です。・・・では、いつもの通りですね。・・・
・野々宮部長には？　・・・はい、分かりました。・・・
・こちらこそお願いします」

プツ。

かなめははうつとため息をついた。

「森先生から預かったのか？」

「うん。レギュラーは急がしいだろうからって」

「そうだな。携帯持ってバスケをするわけにもいかないからな」

「そだね。・・・24日の午後から三田中と練習試合なんだね」

「ああ。県大会も近づいたし、試合の申込みも増えるだろうな。あとで受付可能な学校を教えておくから、後の学校は断ってくれ」

断る・・・。ノーとは言えない日本人というが、かなめも『断り』が苦手なタイプだ。

が、全ての学校からの申込みを受け入れては、二連覇の妨げに

なることは判る。

イヤだけど、がんばろう。とかなめは思った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺が断ってもいいが」

「ううん。私がやる」

かなめがハッキリ言うと、森川がかなめの頭をなでた。
森川が見下ろし、かなめが見上げる。

身長差は25センチ。だが、そうすれば視線が合う。

「・・・・・・・・・・」

「ヒューヒュー！ 見つめあってんじゃないよ！（怒）」

3秒ほど視線が絡んだが、野々宮のチャチャで、2人の視線は野々宮に移った。

「付き合っているんだから、撫でたり、見つめ合うくらい、いいだろうが」

「TPOを考えてくださいー」

「考えているぞ」

「大友ー。なんか森川がいやらしいんですけどー！」

「なんで俺に振る！ それにどこがいやらしいんだっ」

「時と場所によっては、撫でるだけじゃすまない発言をしましたー」

これに、大友とかなめが赤面した。

野々宮はカンが鋭いな、と森川は内心想った。

外野がいなければ、多分もう少しスキップしただろうと、自分でも思ったからだ。

車酔いの少女　くホットラインく（後書き）

じわじわ他校生も増やします。収集はつくのか、私。

車酔いの少女　く見た！　聞いた！　倒れた！　く（前書き）

今日は2話投稿！

車酔いの少女　く見た！　聞いた！　倒れた！く

梅雨といえば、ジメジメ、ムシムシ。

校則違反であることを承知で、自宅から学校の近所にある兄の職場（中華飯店）まで自転車通学をしている角野も、このシーズンはバス通学の常連だ。

その上、目覚まし時計が狂っていて、いつものバスより2本も早いヤツに乗ってしまい、気分はブルー。

降水確率は90%だというのに、雲の隙間から晴れ間が覗く憎憎しい空模様を睨んでいると、マネージャーの水野がバスに乗り込んできた。

（マネージャー、朝、早っええなあ〜）

水野は角野に気付かず、一人用の席に座ると、カバンをゴソゴソ探って、身体を丸めた。

身体をずらして様子を見ると、本を読んでいるようだ。・・・しかもマンガじゃない。

（そーいや、森川と図書館デートしてたっけ）

なんともなしに水野の様子を視界の端に入れていたら、しばらくすると森川まで乗車してきた。

(こいつら・・・朝も一緒なのかよ)

放課後、一緒に帰っているのは知っている。同じバスだというし、付き合っているから当然だろう。

しかし、彼女居ない歴Ⅱ年齢の角野には、リア充なこの2人が甘酸っぱく感じる。

(いずれ、カノジョが出来たらオレもあんな風に通学すのかな・・・)

角野は当然、森川が水野の肩なり叩いて、「おはよう」とか言っちゃって、バスの中でバカップル会話でも繰り出すと思っていた。

2人はそういったキャラじゃないが、角野のカップルのイメージがそうなのだ。

森川は思ったとおり、水野の前に立った。

それは、角野は知らないがいつものことで、その後の森川の行動もいつものことだったのだが・・・。

角野は想像以上の甘酸っぱい風景を朝から堪能してしまった。

「森川よー。おめー、オレが今日の朝同じバスって知らなかっただろ？」

「・・・・・・・・知らなかったな」

「そーだろうよ。おめー、水野しか見えてないってカンジだったもんよ」

昼食。

バスケット部室でいつもの如くレギュラー3年は一緒に食べていた。森川、角野、野々宮、大友、大崎、佐野の6人だ。

佐川は学年が違うので居ない。水野は友人の海野とランチタイムを堪能しているだろう。

「そっか、雨だから角野はバスなんだっけ」

「（チャリ通学は）バレるなよ。活動停止にはならんだろうが、色々五月蠅いからな」

「わーってるよ」

「で、森川と水野がどうかしたのか？」

当然野々宮が乗ってきた。

「どうかしてんのは、森川だよ」

角野はデザートメロンパンをほおばった。

「眠かったけど、森川見てたら目が覚めたぜ。メロンパンより甘いーし」

「じゃ、俺のデザートは森川の激アマ話にするから、詳しく聞かせてよ」

森川はバスに乗り込んで、角野に気付かず水野の席の前に立った。挨拶をするものと思っていたのだが……。

じーっと水野を見ている。

（そして水野は気付かない。どんだけ夢中になって本読んでるんだよ！）

森川は水野の読んでいる本を観察したり、水野の後ろ髪についた寝癖を直したりしている。

（だからなんで気付かないんだ、水野！）

「いつも無表情のくせに、口元笑ってるし」

「うーん・・・気持ち悪いけど、そんなに甘い話？」

「カノジョなんだし、普通だろ？」

「ナマで見た俺は、ものすごく居たたまれなかったんだよ！」

角野がギャーギャー騒いだが、野々宮は不満気な顔で無視して、森川に聞いた。

「本人ここに居るし、ちょっと甘い話でもしてくれない？ 購買で菓子パン買いにいくの面倒くさい」

「くっそ！ 俺は耳を塞いでいるからな！ 俺は聞かないからな！」

これ以上、森川の甘酸っぱい部分を見たくない角野が耳を塞ぐのを確認して、森川が口を開いた。

「俺は・・・・・・・・」

30分後。

「秀司・・・お前そこまで考えていたのか」

「くっ・・・・・・・・なんて破壊力だ。甘すぎて歯茎がケイレンしそうだよっ」

「中学生の考えることじゃねーぜ」

「ご立派と言いたいですが・・・・・・・・怖いですよ、森川君」

4人が倒れ、被害にあわなかった角野が、皆のダメージにビビる。

「聞きたくねーけど、気になるっ！ お前何言ったら、こいつらがこんななるんだよ!？」

「・・・・・・ただ水野との将来展望について語っただけだが」

「あーもー、そんだけ聞いても、甘酸っぱーよっ!!!」

車酔いの少女　く見た！　聞いた！　倒れた！　く（後書き）

見えないけど、実はかなめにベタ惚れなんだよ、森川は、な話。
こんな中学生はいねーと私も思うけど、フィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145y/>

車酔いの少女

2011年11月25日18時56分発行